

## 小児がん拠点病院選定と当院での取り組み

(文責 小児科 渡邊健一郎)

本年 2 月に小児がん拠点病院として、当院を含む 15 施設が選定された。

小児がんは、成人の癌と比べ稀で癌種も異なるが、この 20-30 年の診断・治療法の進歩により、適切な診断・治療が受けられれば多くの疾患が治癒可能となった。一方で、小児がん診療では、化学療法や放射線といった治療や長期に渡る入院生活が、発育や発達に大きな影響を及ぼす可能性がある。従って、小児がんを治療する場合には、長期に渡っておこり得る合併症を考慮した治療法を選択すると共に、治療中、治療後の発育・発達を、家族や学校教育を含めて支援していく体制が必要である。しかし我が国では、小児がん診療の集約化が不十分で、患児がどの病院に受診するかで、受けられる治療の質が異なり、その後の運命が大きく左右されるという状況が続いてきた。さらに、医療レベルの高い病院においても、十分なインフラや人的・経済的な裏付けが得られず、小児の発達を保証し、家族を支援する体制、療養環境の整備を進めることは必ずしも容易ではないという実情がある。このような背景をもとに、国の政策としてわが国の小児がん医療の向上を目指し、小児がん拠点病院が整備されることになった。

小児がん拠点病院には様々な役割が求められている。集学的治療、地域医療機関との連携、小児に対する緩和医療、思春期・若年成人(AYA 世代)患者の診療、長期フォローアップ体制、小児がん相談・情報提供、家族の長期滞在施設、治療開発といったどれも重大な課題である。当院では、まず、小児がん拠点病院としての役割を果たすための組織づくりを行った。上記の課題を検討する多職種からなる小委員会を組織し、それぞれで挙げられた事項を総合的に検討し、重要事項を決定する検討委員会を設置した。今後、この機構を中心に、病院全体として事業を進めていくこととなった。

当院では、白血病、骨・軟部腫瘍、脳腫瘍を含むあらゆる小児悪性疾患に対応が可能である。小児科病棟、外来を中心に診療が行われるが、京大がんセンターにおいて診療科を超えた横断的診療体制が整っており、小児がんユニット、小児脳腫瘍ユニットを中心に円滑な集学的治療を行っている。また、思春期や若年成人にも、小児がんの範疇に含まれる腫瘍が発生することがあるが、年齢を超えて、シームレスに関連診療科が連携して臨む体制が構築されている。難治・再発症例に対しては、造血細胞移植や、肝芽腫に対する肝移植を始めとする高度医療を行っている。小児がん拠点病院に指定されたことで、地域の医療機関との連携を強め、わが国の小児がん診療の一層の充実に寄与したい。

小児がんにおいても臨床研究による治療開発は重要である。当科は日本小児白血病リンパ腫研究グループ(JPLSG)を始めとする多施設共同研究をリードしてきた。当院が臨床研究中核病院に指定されたのを契機に、京大がんセンターでも臨床試験支援体制が拡充された。こうした強固な基盤を利用し、小児がんに対する治療開発を積極的に展開しようと考えている。

小児に対する緩和医療は、小児がんを始めとして重症児を多く診療する当院が率先して扱うべき課題であると考えられる。小児緩和医療においては、年齢や発達段階に応じた対応が必要で、親を含めた家族へのケアが非常に重要となる。また、自分で意志決定することが困難であり、倫理的な問題も生じやすい。成人と比較し、症状緩和においても十分なエビデンスはなく、ホスピスや在宅ケアの提供体制も整備されていない。当

院では、小児科医師、看護師、がんサポートチームを中心に、理学療法士、作業療法士、医療ソーシャルワーカーなどが連携して、小児に対する緩和ケアを行ってきた。小児がん拠点病院に指定されたのを契機に、小児に対する緩和医療を専門にされている聖隷三方原病院の天野功二先生にチームに加わっていただき、組織づくり、実践、スタッフの教育、情報提供を行っていくこととなり、活動を開始している。

わが子を小児がんと診断された親の動揺や不安は計り知れず、治療中も様々な面でサポートが必要となる。小児がん患者、家族に合った相談や情報提供は重要であり、これも小児がん拠点病院としての重要な役割となっている。当院では、がん相談支援室、小児科病棟・外来、患者会であるきょうとたんぽぽの会が連携し、小児がんに対する相談体制の拡充を始めている。

小児がんの領域には、思春期・若年成人患者のケア、小児がん経験者の長期フォローアップと、一般的に小児科の対象年齢の上限と考えられている 15 歳を超えた患者を対象とする課題がある。これらは小児科だけで対応できる問題ではなく、成人を対象とする診療科、病棟との協力が不可欠である。当院では、血液腫瘍内科病棟での小児科病床配置、長期フォローアップ外来の開設を行ってきたが、今後より充実した体制の整備が必要と考えている。

小児がん拠点病院には、選定された施設のみでなく、その地域全体、延いては日本の小児がん医療の向上に貢献する責務がある。当院での小児がん拠点病院としての取り組みはまだ始まったばかりであるが、京大がんセンターを始め様々な部署で積極的に協力していただける方との出会いに感謝している。今後も、様々な方から知恵を借りながら、施設の枠を超えて当院の取り組みが広がるようにしていきたい。